

はじめに

一、綱領の未来社会論と『資本論』

- (1) 「個人的所有の再建」
- (2) 「自由の国」と「必然性の国」

二、第一部の中心点

- (1) 第一篇では、「資本」は出てこない
 - ・ 価値と使用価値——労働の二重性について
 - ・ 市場経済の効用と否定面
 - ・ 「恐慌の可能性」について
- (2) 第二篇～第六篇——剰余価値と搾取の過程を研究
 - ・ 資本主義的生産の「推進的動機」「規定的目的」——“利潤第一主義”
 - ・ 剰余価値生産の二つの方法
 - 絶対的剰余価値の生産
 - 相対的剰余価値の生産
 - 労働密度を高める方法（第一三章「機械と大工業」第三節c「労働の強化」）
 - 利潤率を高める方法として、他に不変資本の節約がある（第三部・第五章）
 - ・ 「労賃」は資本主義的搾取の本質を隠す現象形態
 - ・ 「一六世紀」論への注目
- (3) 資本の蓄積過程とは（第七篇）
 - ・ マルクスが第一部刊行後、叙述の充実にいちばん力を入れた部分
 - ・ 基本概念の整理——単純再生産（第二一章）、拡大再生産（第二二章）
 - ・ 蓄積過程がどのように進むのかの研究——第二三章
 - 資本の有機的構成、相対的過剰人口、産業予備軍
 - 「富の蓄積と貧困の蓄積」
 - ・ 資本主義的生産様式の始まり——本源的蓄積（第二四章）
 - 第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」

三、第二部、第三部の“あらし”

(1) 第二部では、資本が市場経済の舞台に登場する

- ・第一部では、流通過程は正常に進むことが前提とされていた
- ・第一篇（循環）、第二篇（回転）——流通過程で資本がとる独特の姿の解明
- ・第三篇「社会的総資本の再生産と流通」

これまでは、個別の資本の再生産と流通が考察の対象。ここではじめて、いろいろな資本の社会的な規模での絡み合いのなかで、それぞれの資本が流通過程をうまく通過できるかどうかの条件が研究される。

拡大再生産表式——マルクスの四回の挑戦

(2) 第三部——資本主義の現象世界に一步一步近づく

- ・第三部の主題はなにか
- ・剰余価値から「利潤」へ
平均利潤率の成立——市場価格の基準が価値から「生産価格」へ
- ・剰余価値の分割（商業利潤、利子、地代）
- ・「資本関係の外面化」

四、第二部、第三部の新しい「読み方」

——最近の『資本論』研究からの新しい理論的提起について

(1) 『資本論』はどんな状態で私たちに残されたのか

(2) 第二部の「ミッシングリンク」

- ・第二部は恐慌論の“本番”
- ・マルクスが残した八つの草稿とエンゲルスの編集の経過
- ・恐慌の運動論的な考察

(3) 第三部「信用論」の難しさ

- ・「信用論」部分の草稿とエンゲルスの編集
- ・“不破さん流”の読み方

以 上